放送教育開発センター研究紀要第12号（1995年）
Bulletin of the National Institute of Multimedia Education, No. 12, 1995

吉田健一における翻訳と創作

島　内　裕　子

The Translation and Creation of Ken'ichi Yoshida

Yuko Shimauchi

Abstract

This paper aims to survey the formation of Ken'ichi Yoshida's literature.

In doing this the author first traces the history of Yoshida's reading from his early days to youthful days.

In the second place, takes up his translation of Poe, Valely, and Laforgue.

In the third place, examines his early works in the point of view what experience produces them.

Finally, the influence of translation in his creations, is pointed out.

キーワード

吉田健一、ヴァレリー、ラフォルグ、翻訳、創作、英国留学

1．はじめに

人は、いかにして文学者となるのか。吉田健一に即して、このことを考察してみたい。幼年期からの読書体験と青年期からの翻訳体験が、彼の著作と創作にどのように反映しているかを辿ることによって、吉田健一の文学形成の一面が、明らかになるであろう。

本稿では、まず最初に、吉田健一の読書体験について考察し、次に、三〇歳代前半までの訳業を概観し、次いで、初期の著作である『英国の文学』と『シェイクスピア』と『東西文学論』について吉田健一の文学形成における意義を確認し、最後に、どのような書物

放送教育開発センター研究協力者、放送大学教養学部助教授

が著作や創作に取り入れられたかを指摘する。なお、本稿で吉田健一の「著作」と言う場合は、彼の評論やエッセイを指し、「創作」と言う場合は、小説を指すこととする。

一般に、読書体験が執筆活動にとって、重要な役割を果たすことは当然のことであるが、吉田健一の場合はそれに加えて、数多くの翻訳を行なってきたことが、後年の盛んな執筆活動を促す原動力となっているように思われる。彼の著作・創作には、読書によって獲得した知識や表現が引用されているし、また、自分が翻訳した書物からの引用も多い。それらは非常に数が多いので、本稿で取り上げるものは限られてくるが、吉田健一の文学形成にとって、特に重要と考えられる箇所を中心に論述することにしたい。

2．幼年期から青年期までの読書体験

吉田健一は、昭和29年３月１日号の『日本読書新聞』に掲載された「私の讀書遍歴」において、幼年期の愛読書について、次のように書いている。

> 言葉の美しさといふものと、言葉だけで築かれるはつきりした一つの世界があるといふことを最初に教へてくれたのは、その昔、冨山房の童話選集の一冊になつて出てゐた長田幹彦氏譯のアンデルセンのお伽噺である。（中略）
>
> そのアンデルセンを讀んだのはまだ小學生の頃で、長い間、これ程心を捉へた本はなかつた。

小学生がアンデルセン童話に感動するという体験は、決して特別なことではない。しかし、多くの子どもは、それらのお話の筋や内容に感動するのであって、「言葉の美しさといふものと、言葉だけで築かれるはつきりした一つの世界」の存在に、もし吉田健一がこの時点で気付いていたとしたら、後年文学者となる資質はすでに胚胎していたと言うべきだろう。しかも、このアンデルセン童話集の影響については、他のエッセイでも、次のように述べているくらいである。

> 「海は深い。教會の塔をいくつも重ねて……」などといふ「人魚」の書き出しらしい言葉までがまざまざと記憶にあつて、自分の現在の文體にも、この譯の影響がどこかに見られるのではないかと思ふくらいである[1)]。

長田幹彦の翻訳が、自分の文体にさえ影響しているのではないか、という回想は重要である。吉田健一がこの本をどれほど繰り返し耽読したかがわかる。この冨山房版アンデルセン童話集を現在手に入れることができれば、吉田健一の文体との比較が可能であろうが、残念ながら未見である。彼自身、「古本屋を探しても見付からずに今日にいたつてゐる」[2)]と書いている。「私の讀書遍歴」でアンデルセン童話集の次に挙げられているのは、暁星中学の４年生か５年生の時に読んだアナトオル・フランスの「我が友の書」の一節であるが、この本自体にはそれほど感銘を受けなかったと書いている。

3番目に挙げられているのは、スティヴンソンのエッセイである。

> その頃、同じく名文で打たれて手当り次第に讀み漁つたのはスティヴンソンのエッセイである。「驢馬を連れてのセヴェンヌ紀行」や「内地の船旅」などに見られるスティヴンソンの放浪癖に刺戟されて、自分でも東海道を徒走旅行しに出掛けたりしたくらいだつた。

ここでは徒歩旅行とあるが、集英社版『吉田健一著作集』の年譜によれば、昭和5年の3月末の奈良までの自転車旅行のことであろう。このような旅行をしたこともさることながら、さらに重要なのは、後年の文学活動と関わりを持つ点である。なぜなら、昭和24年に文芸春秋選書20に『風流驢馬旅行』という題で、吉田健一自身が翻訳し、その後、昭和26年には岩波文庫から『旅は驢馬をつれて』という題で、「内地の船旅」とともに翻訳しているからである。しかも、この岩波文庫版のあとがきには、作品解説の形を取った青春論が、次のように書かれている。

> この二篇には彼の思想の凡て、性格の凡てが既に窺われ、ここには又彼の青春が語られている。そして彼のように、一生のうちでそれ程の思想上の変遷とか、作風の老熟が見られず、言わば、まるごとこの世に現れた人間の場合は、青春の歌が全人的な表現ともなるのであり、そこに我々は更に、永遠の青年たるスティヴンソンの風貌に接するのである。年取ることは誰にでも出来るので、青春を失わずにいることこそ貴重なのではないだろうか。そして少なくとも、スティヴンソンがこの二篇に書き留めた青春は、今日我々が読んでもそこにまだ生きている[3)]。

吉田健一がこのあとがきを書いたのは、39歳の時である。彼は青春について直接語ることは少ないが、ここにはおそらく自分自身の青春期への懐旧の念が込められているのであろう。

「私の讀書遍歴」によれば、その後、バルザックの「谷間の百合」やジイドの「狭き門」を読み、特に「狭き門」に引用されていたシェイクスピアの「十二夜」との出会いがあった。また、「ファウスト」は英訳で読んだこと、さらにヴァレリイやヴェルレエヌなどの詩を一通り読んだことが書かれている。ヴァレリイは、吉田健一の文学形成において非常に重要な役割を果たした文学者である。彼のヴァレリイとの出会いは、シェイクスピアの場合と同様、直接的というよりは間接的であって、堀口大學の『月下の一群』によってであったという[4)]。『月下の一群』には、ラフォルグの詩も収められているから、吉田健一がラフォルグに興味を持ったのも、この訳詩集を通してかもしれない。

「私の讀書遍歴」の最後には、今は手元にないがもう一度ぜひ読んでみたい本として、マルドリュスによる仏訳「千夜一夜」と矢田挿雲の「太閤記」が挙げられている。この読書エッセイは、400字詰原稿用紙に換算すると5枚あまりの短いものである。その中に、小学生の頃の愛読書であったアンデルセンからヴァレリイなどにいたるまでの読書遍歴が印象

深く語られており、魅力的な小品となっている。しかし、ヴァレリイまでならよくある文学者の回想とあまりかわらないだろう。シェイクスピアやゲーテやヴァレリイといった文学者たちは、文学に携わる人々にとってこの上なく大きな存在だからである。けれども、このエッセイの末尾部分で、「千夜一夜」と「太閤記」が登場する点に、文学者としての吉田健一の個性が集約されている。

ヴァレリイと「太閤記」を自分の愛読書として同列に置くことのできる人は、少ない。彼にとって文学の世界とは、ある狭い領域を限るものではなく、伸びやかに広がりを持つ世界なのである。このような読書嗜好は、父親の吉田茂譲りかもしれない。「私の讀書遍歴」に先立って、昭和24年12月18日付の『毎日新聞』に発表された「父吉田茂の読書」にも、興味深いことが書かれている。吉田茂はアガサ・クリスティなどの推理小説を好み、またP・G・ウッドハウスというユーモア作家の愛読者だったという。そして、「併し父の蔵書の中で、私自身の興味を最もひいたのは日本の大衆小説である。」として、直木三十五や大佛次郎や岡本綺堂や野村胡堂などの、時代物を愛読していたことが語られている。「父吉田茂の読書」は次のような文章で締め括られている。やや長くなるが、ここには吉田健一の文学観がよく表われているので、最後の段落全体を引用してみよう。

> 何も英米に限つたことではないと言へるかも知れないが、讀書に限らず、さういふ堅實な一つの生活態度は、今日では殊に英米人の間に顕著であると言へるのではないだらうか。文學に、文化に、日常生活といふ風に、もの事を細かく区切つて考へずに、人間の世界、或は生活を一つの総體として把握するといふことは、要するに、良識といふことに帰着するのだらうが、日本人の生活に良識が失はれてから久しいやうな気がする。純文學、本格小説、大衆文學と言つた細かさ、またそこから生じる枯渇である。その意味で私は、父が日本の現代小説を讀まうとしないのを、父に文學の趣味がないからだとは思つてゐない。何時だつたか父は、日本の現代作家の作品にはユウモアがない、ユウモアがないのは思想がないからだといふ意味のことを言つたことがある。そしてさういふ本格的な作家の最後として、夏目漱石を挙げた。日本の現代文學に対する父の理解の程度はともかくユウモアがない所に思想がないといふのは、文學上の一つの根本的な課題である。

ここに書かれている文学に対する吉田健一の闊達さは、後に数々の文学論となって結実することになる。

「私の讀書遍歴」にもう一度戻れば、彼は、「千夜一夜」と「太閤記」について、「この二つに何の共通点があるかと問はれれば、豊饒な想像力とでも答へる他ない。」と述べているが、「豊饒な想像力」とは、そのままさに吉田健一の創作の世界を表わすことばである。「私の讀書遍歴」は短いエッセイであるが、吉田健一の文学世界の原型、すなわち、文学とは「言葉だけで築かれる」「豊饒な想像力」の世界である、という文学観を垣間見させてくれる重要なものであった。このエッセイを発表した翌年の昭和30年に、彼は『東西文学論』を刊行している。以後生涯にわたって何冊もの文学論を著わした吉田健一の原点として、

「私の讀書遍歴」と「父吉田茂の読書」の二つの短いエッセイを位置づけることができよう。

吉田健一の読書体験については、この他に森鷗外が非常に重要な位置を占めていること、および『書架記』という著作に、ラフォルグからディラン・トオマスまで14人の文学者が取り上げられていることを記しておきたい。

3．30歳代前半までの訳業

吉田健一の文学活動は、23歳の時に翻訳したエドガ・A・ポオの『覺書（マルジナリア）』から始まった。この本の発行所は芝書店、昭和10年11月15日発行、定価１円30銭であった。なお、２、３年前、古書店の目録で偶然『覺書（マルジナリア）』を見つけ、早速購入することができたが、最後のページに付いている刊行書広告を見ると、吉田健一が「本のこと」というエッセイで書いていることが、確認できる。このエッセイは、昭和37年12月の集英社版『世界短篇文学全集』第17巻の月報である。そこに収録されている横光利一や梶井基次郎などの、昭和の日本文学者たちに触れた最後に牧野信一の本にまつわる思い出を書きながら、次のように述べている。

> 牧野信一の「鬼涙村」にも思ひ出がある。牧野さんが亡くなる少し前に、芝書店から短篇集が二冊出て、もう一冊の題は忘れたが、一冊の題がこの「鬼涙村」だつた。箱も、中身の表紙も、黒と白に等分に染め分けられてゐて、一冊の白い所がもう一冊の方では黒くなつてゐるといふ装釘だつた。この二冊も今はもうないが、それを出した芝書店といふ出版社も戦争が終る前になくなつてゐた。目黒駅から芝の方へ行く電車通りの、昔の海軍大学と向き合ふ位置にあつた小さな出版社で、それでもここからは河上徹太郎氏の「自然と純粋」、「思想の秋」などの初期の文芸評論集、小林秀雄氏の「続々文芸評論」、正宗白鳥の短篇集「異郷と故郷」など、その道の蒐集家ならば知つてゐる筈の本が何冊か出てゐる。河上、阿部六郎共譯のシェストフの哲學論集もここから出た[5]。

ここに挙げられている本は、『覺書（マルジナリア）』の最後のページの広告欄では、次のような順序で広告されており、22冊目の最後のところに『覺書（マルジナリア）』が掲載されている。吉田健一のエッセイでは「異郷と故郷」とあるが、ここでは「異境と故郷」となっている。

正宗白鳥著　異境と故郷　小説集　定価２円
河上徹太郎著　自然と純粋　文芸評論集　定価１円80銭
河上徹太郎著　思想の秋　文芸評論集　定価２円20銭
小林秀雄著　続々文芸評論　定価２円20銭
（中略）
レオ・シェストフ　悲劇の哲學　上製　品切

河上・阿部共譯　ドストエフスキー……ニイチェ　普及版　1円30銭

さて、『覺書（マルジナリア）』であるが、先ほど吉田健一の幼年期から青年期にいたるまでの読書体験を辿った際に、ポーのことは出てこなかった。しかし、23歳の若さで翻訳するからには、それ以前にポーに相当親しんでいたのであろう。この本の附記は、ごく簡略に書かれており、彼がどのような経緯で翻訳することになったのか、そのあたりの事情は何も記述がない。わずかに、「譯しても余り面白くないやうなものは省略したけれど、譯し甲斐のあるもので見逃したものは先ずないと思ふ。（中略）若し私の譯が少しでも原文の意味を伝へて居るなら、此の和譯「マルジナリア」も面白い本である筈だと信じる。」という部分に、自負が感じられるくらいである。

しかし、この『覺書（マルジナリア）』は吉田健一の文学活動にとって、文字通りの第一歩であった。なぜなら、年譜によれば、彼はそれ以前にはほとんど活字にして発表したことがなかったからである[6]。その後、翌年の昭和11年から、主として『文学界』に海外文学事情の紹介記事や短い翻訳などを発表し始めるようになる。吉田健一は、昭和５年にケンブリッジ大学に入学したが、大学に入ってまだ１年とたたない冬、「日本に帰つてから文士になる積り」だったので、帰国する決心を固めた、と回想している[7]。まだ19歳の若さであった。文士になる決心は、『覺書（マルジナリア）』の翻訳を出版することによって、実現への第一歩を踏み出したのであった。

吉田健一がポーについて論じているのは、『詩と近代』に収められている「ポオ」が最も詳しいものの一つであろう。また、翻訳としては、昭和23年に若草書房から『赤い死の舞踏』、昭和34年に筑摩書房・世界文学大系33『アモンティラドの樽』、昭和38年に東京創元新社から『ポオ全集・３』、昭和45年に集英社から世界文学全集デュエット版18『ポオ』を訳している。

『覺書（マルジナリア）』に次いで吉田健一が翻訳したのは、ヴァレリイの『精神の政治學』（昭和14年６月・創元社）と同じくヴァレリイの『ドガに就て』（昭和15年10月・筑摩書房）である。ヴァレリイは、吉田健一にとって非常に重要な文学者であり、ヴァレリイの著作や詩の翻訳も多い。なお、架蔵本『精神の政治學』は、昭和15年４月発行の第２版であり、『ドガに就て』も昭和15年12月発行の再版である。どちらの本も初版後早い時期に再刊されており、よく読まれたことがわかる。

最初の翻訳『覺書（マルジナリア）』から、５、６年経ったこれら二冊の翻訳には、吉田健一が彼自身のことばで、序文や跋文で批評的にヴァレリイの文学について語っており、ポーの場合と比べて、格段に訳者の立場を超えた文学者としての肉声が響いてくる。これらの翻訳書は、彼の著作集などでも取り上げられることが少ないので、序文や跋文が目に触れることはあまりない。しかし、吉田健一の初期の文学世界を知る上で重要なものだと思うので、部分的ではあるが引用してみたい。

『精神の政治學』は、創元選書18として刊行されたものである。ちなみに、創元選書17は、堀辰雄の『かげろふの日記』である。さて、この『精神の政治學』の「譯者の序」の冒頭で、吉田健一はヴァレリイについて、次のように述べている。

欧州では、ヴァレリイが極めて難解な作家であり、それ故に彼が高遠な思想家であると考へられてゐるやうである。ヴァレリイの思想は暫く措くとして、彼の文章が難解であるといふことは、ヴァレリイを實際に讀んだことがあるものにとつては不可解な事情である。「難解」といふのは、ある文章を讀んでその意味を解し兼ねるといふこと以外の意味を有する言葉なのだらうか。言葉とは、言葉によつて言ひ現せることを表現するのに用ゐられる手段である。そしてその表現に用ゐられる言葉が、表現せんとする内容の諸相貌を的確に指示するものであればある程、我々は内容たる観念を明確に把握することが出来る。ヴァレリイは、言葉といふものがあることを表現するのに、どの程度にまで正確であり得るかといふことを生涯追究し、全くその努力の結果として、あらゆる名文の特徴たる朗々さを獲得した、最初にして恐らくは最後の作家である。

ここに書かれている文章は、まるで強く張った弦が高らかに鳴るような、27歳の青年の明澄な文学宣言であり、読む者の胸を打つ。吉田健一は決して皮肉や逆説を言っているのではない。彼は、世間の人々の「ヴァレリイ神話」に率直な疑問を投げ掛けているだけなのだ。なぜ世間の人々はヴァレリイを難解だと言うのか。彼にとってのヴァレリイの文章は、内容を的確に表現した朗々たる名文であるのに。文学常識に捉われないこのような彼の文学観は、生涯を貫くものとなっている。

『ドガに就て』には序文はないが、跋文が付いている。その中で次のように述べている部分は、吉田健一自身の著作とも関わってくるものである。

此の作品で我々がヴァレリイを殊に親しく感じるのは、老境に入つた彼の散文の無比な冴えと相俟つて、彼が其処で一人の友達の思ひ出を語つて居るからであるやうに思はれる。ヴァレリイがドガに最初に曾つた時、ドガは既に六十を越して居た。そしてその頃の記憶を辿るヴァレリイの言葉を讀みながら、我々は、ドガといふ人物の強烈な性格に引附けられるのと同時に、ドガとの交渉があつてから五十年の後に、彼と略同年輩となつたヴァレリイが我々に語つて居るのだといふ事實に一層の懐しさを感じるのである。

吉田健一は、ヴァレリイのドガに対する人間的な親しみに同感している。そしてそのようなヴァレリイの語り口の中に、ヴァレリイ自身への懐かしさを感じる、と述べている。昭和49年に新潮社から刊行された吉田健一の『交遊録』には、この30年余り前に翻訳した『ドガに就て』から学んだことの残響が響いている。

吉田健一は昭和14年から19年までの間に、先に挙げた二冊の他に、筑摩書房から『ヴァレリイ全集』の7・13・5・9・10・14・3の7巻を担当して翻訳している。

ヴァレリイに次いで吉田健一が翻訳したのは、昭和22年、35歳の時に角川書店から刊行したラフォルグの『ハムレット異聞』である。ラフォルグも彼にとって重要な文学者である。ラフォルグの翻訳はその後昭和24年に、若草書房から『伝説的な道徳劇』を出版し、

これらをまとめたかたちで、昭和50年に小澤書店から『ラフォルグ抄』を出している。ラフォルグの翻訳に先立つ、ラフォルグに関する吉田健一の評論としては、昭和14年１月号の『文学界』に発表したものがあり、これがラフォルグについての最初のまとまった評論である[8]。それ以前には、『覺書（マルジナリア）』の翻訳と、『文学界』の海外文学欄などの短い記事や翻訳を書いていただけであり、エッセイとしても昭和13年８月号の『文芸』に「剣橋の学生生活」を発表していただけであるので、この昭和14年の「ラフォルグ論」は、吉田健一の批評活動の実質的な開始を告げるものと言ってもよい。

この「ラフォルグ論」は、『精神の政治學』の刊行の半年前に発表されたものであるが、ヴァレリイの翻訳の序文と一対となって、27歳の青年吉田健一の精神世界が投影されていると考えられる。それは、ヴァレリイの明晰さへの傾倒と、ラフォルグの苦悩への共感である。この評論を書いてから34年後、『書架記』の冒頭に置かれた「ラフォルグの短篇集」のなかで、ラフォルグがいかに自分にとって親しいものであったか、ということを、「こんなことを書いた人間もゐたのかと思ふよりも前世か何かで自分が書いたことをそれまで忘れてゐた感じだつた。」[9]とまで述べている。

この「ラフォルグ論」では、ヴァレリイとラフォルグという当時、吉田健一にとって最も重要だった二人の文学者について、次のように関連づけている。

> ラフォルグは、近代に於る人間行為の著しい乏しさを熟知して、その理論を完全に身に付けてしまつてから世に登場した人間だつた。彼は意義をまだ豊富に、冷酷に残つてゐる過去にしか認め得ず、既に生きてゐないそれ等のものの徐々に朽ち果てて行く有様が、彼の眼には美として映つた。即ち近代には、過去の絢爛たる死体に接して漸く勢い付く程度の生命力しか残つてゐないことを彼は知つてゐた。凡てが既にある近代に於ては、過去への回顧と頽廃の賞玩との他に生甲斐のある行為はなかつた。唯物的な蟻の世界も、彼にとつては輝かしい未来ではなく、一つの不愉快な結論だつた。ワツトオの絵に於る、時のせゐでか真黒な背景が浮び上らせてゐる宮廷人のきらびやかな絹の衣裳の光沢を思ひ出すべきである。ワツトオの絵の絹の艶が、ラフォルグの詩人としての身上だつた。
>
> 即ち近代の救ひをラフォルグに求めることは出来ない。それはヴァレリイに待つべきである。

「近代」ということは、吉田健一の生涯にわたる思索のテーマの一つとなったが、その萌芽がここに現われていることに、まず第一に注目したい。そして、第二に、ラフォルグとヴァレリイの両者を視界に入れることによって、「近代」とは何かということの輪郭が浮かび上がるであろうという予感が早くもこの時点で、提示されていることに注意したい。第三に、このことがあるいは最も大切なことかもしれないが、先に引用したように、ラフォルグの中に自分を発見した彼にとって、「過去への回顧と頽廃の賞玩との他に生甲斐のある行為はなかつた」というラフォルグ評は、そのまま吉田健一の問わず語りの自画像となっていることである。

さらにこの「ラフォルグ論」に対して付け加えるならば、ここでは吉田健一が彼の批評の全体を見渡してもあまり正面切って論じることのなかった、女性論がラフォルグに託して書かれている点も、見落としてはならない。

> 彼にとつて女は自分でもなく、自分の作為の関与する何物でもなかつた。即ち女は思想でも、神でもなく、然も、ただそれ等によつて抽象することが出来ないだけの、精神的な存在だつた。そこに女といふものの、ラフォルグにとつて逃れ得ない魅惑があつた。と言ふのは、ラフォルグは精神とその生産物の凡て、即ちその意味に於て世界の凡てを了解したと信じてゐた。然るに同じ精神によつて自己を支配するものでありながら、女の自己やその表現には、何かラフォルグには全く予測することが出来ないものがあつた。それ故に女は、彼が知つてゐる以外のことを知つてゐるやうに見え、それが現実の世界に関することではあり得なかつたから、女の知つてゐることと、彼が恒久的に憧憬してゐた超現実の、未知の世界とは、同じものとなつた。現実には認められない、万有の支配者として存在するべき理想が女に片影を留めてゐるやうに見えたのはその為だつた[10]。

ここで書かれていることの論旨はきわめて明快である。「世界の凡てを了解したと信じてゐた」青年にとって、女というものがもし彼が知っている以外のことを知っていると思われたなら、女が知っていることは「超現実の、未知の世界」でなければならない。しかし、この論証のそもそもの基盤である「世界の凡てを了解した」ということ自体は、何によって保障されているのか。ここに、明晰で知的な人間であればあるほど陥りやすい袋小路が待ち受けている。

しかし、このあたりのいかにも生硬な女性論は、その後の吉田健一の文学世界では影を潜め、彼の創作に登場する女性たちは、普遍的な人間そのものとなる。昭和46年に刊行された『絵空ごと』に対する書評で、石川淳は、「このサロンには女性もあらはれるが、これはどうも男性の同類といふ嫌疑があつて、うつかり手もにぎれまい。」と述べている[11]。

吉田健一の最初の文学活動である翻訳を辿ってきたが、20歳代から30歳代前半までは、ヴァレリイとラフォルグを中心とする翻訳を行いながら、文学の本質や近代について思索を重ねている時期であった。そして、これらの文学的な蓄積の上に、昭和24年以後の評論活動が開始されることとなる。

4．初期の著作について

ここでは吉田健一の初期の著作として、昭和24年の『英国の文学』、昭和27年の『シェイクスピア』、および昭和30年の『東西文学論』の三冊を取り上げて、この時期における彼の文学形成を、主としてそれ以前の読書体験と翻訳体験の反映という視点から、概観してみたい。

先に見てきたように、吉田健一の初期の翻訳は、ポーとヴァレリイとラフォルグの三人

であった。しかしながら、最初の書き下ろし評論『英国の文学』は、彼らについてではなく、チョーサーからハーディーにいたるまでの、英国の文学についてであった。文芸雑誌などにイギリス文学に関する記事や紹介は書いていたが、まとまったイギリス文学史を書き下ろすということは、それまでの10数年の翻訳活動から考えると、やや意外な感がしないでもない。なぜ彼は『英国の文学』を最初に書いたのだろうか。

『英国の文学』を読めば、この本が決して単なる文学史の本でないことは、ただちにわかる。そして、この本で彼が目指したのは、確かに、「理論と抽象の道を拒んで、文学の解釈を風土と人間に結びつけようと試みた」[12)]のであったろうが、「風土と人間」とは、この場合、吉田健一のイギリス体験と分かち難く結びついており、そのことが執筆の原動力となっていることを忘れてはならない。

『英国の文学』の第一章が、なぜ「英国と英国人」という章から始まっているのか。そして、なぜイギリスの冬の厳しさから書き始められているのか。昭和35年4月号の『英語青年』に発表された「ケンブリッジ入学当時」というごく短いエッセイがある。これは現在最も浩瀚な、集英社版『吉田健一著作集』にも収録されていない、片々たるものではあるが、そこに書かれている次のような回想とも、重なってくるのである。

> 入学しても、あてがわれたのは郊外の下宿だった。（中略）しかし老朽した下宿で、その上に、英国はもう冬だった。英国の冬は、どう説明した所で解ってもらえるものではない。その冬の夜長を下宿のガス暖炉に向って過して、これが本当にケンブリッジなのだろうかと何度も思った。

吉田健一の著作や創作を読むと、全体に明澄でユーモアがあり、まるでモーツァルトの音楽のようであるが、時として現われるモーツァルトの短調が深淵を垣間見せるのと同様に、吉田健一の文学世界にも、明るい光の裏側に影の部分がある。その影とは何であったのか、全貌はまだ究め尽くされていないが、青春期に深い人生上の苦悩があったらしいのは、初期の創作「過去」やラフォルグ愛読などからも、おぼろげながら想像される。

この時37歳になっていた彼にとって、『英国の文学』は、20年前の彼の青春時代を総決算するものであり、本書を執筆することによって、吉田健一はみずからを直接語ることがないにもかかわらず、自分の精神の過去を振り返ることに成功し、次なる文学的視座を獲得できたのではなかろうか。したがって、第2作『シェイクスピア』は、『英国の文学』の延長線上に位置づけられるが、第3作『東西文学論』は、彼の新たな展開を示した評論として位置づけられる。なお、『シェイクスピア』と『東西文学論』の間には、それまでに発表したエッセイをまとめた著作があるが、吉田健一の文学形成を辿る上で、今はこの本に関する考察は省略した。

さて、『東西文学論』は、昭和30年、43歳の時にまとめられた文学評論である。これは、11章からなるが、雑誌に発表された時は、第5章までが「東西文学論」の題で『新潮』に、第6章から9章までが「文士外遊史」の題で『文学界』に発表され、第10章は初出未群、第11章は書き下ろされて、以上をまとめて新潮社1時間文庫として刊行された、という経

緯を持つ。

『東西文学論』は、いわゆる「文学常識」に対するきわめて痛烈な皮肉な満ちた著作であり、そのことは冒頭の一文に象徴されている。

> 比較文學といふことがこの頃言はれるやうになつたが、文學に就て考へ始めればさういふ名称を知らうと知るまいと比較文學になる。

「比較文学」という魅力的な新しい学問を、吉田健一はあっさりと否定する。事新しくそのようなことを持ち出すまでもなく、文学とは古今東西、広がりを持ったものであり、それが文学本来の姿である、と述べているのだ。つまり、吉田健一が『東西文学論』で述べようとしたことは、文学というものを狭い概念から解放することであった。「父吉田茂の読書」でもすでに同様のことが書かれていたが、彼の文学観は、次のような部分により一層先鋭な形で書かれている。

> 文學作品を讀む手引きに「文學入門」といふ題の本を買ふのが、もう一つの日本的な文學の観念を現してゐる。文學が何か極めて高級なものであり、専門家の意見を聞いてからでなければうつかり近寄れないといふ考へで、これは他所で前にも触れたが、かういふつまらない偏見を叩き壊すまでは何度繰り返して言つても足りない。文學の讀者までが苦労するのなら文學などない方がいいのに決つてゐる。苦労するのは文學者の方である筈で、讀者までが迷惑するとすれば、それは文學者の怠慢である。尤も、文體の響きに胸を打たれることがない、文學と縁がない讀者は別である。

吉田健一が『東西文学論』の中で述べているもう一つ重要なことは、「影響」ということについてである。第2章で彼は、日本の近代文学は、ヨーロッパ文学を自分のものとすることによって一人立ちできる段階に達した、と述べている。このことは同時に彼自身のことを述べているとも考えられる。この『東西文学論』もやはり、吉田健一の精神の自画像であるという意味では、『英国の文学』と通底するものがあるのだ。

特に本書の後半部の文学者たちの留学を扱った章に、そのことは顕著である。『英国の文学』が彼のイギリス体験に基づく実感的なものであったとすれば、この『東西文学論』は、彼にとって留学が何であったのか、という自己の相対化であったと位置づけることができよう。こうして、吉田健一の文学活動は、初期の翻訳から評論へと広がりを持ちつつ展開していったが、本稿の最後として、吉田健一の創作において、読書体験や翻訳体験がどのように反映しているか、気づいた箇所を挙げてみよう。

5．創作に取り入れられた読書体験と翻訳体験

吉田健一の文学活動において、特に世評が高いのは『ヨオロッパの世紀末』や『時間』などの評論であるが、彼の文学の魅力はそれらの著作にとどまらない。数々の創作には、

複雑で陰翳に富んだ彼の思索が、登場人物たちの日常会話の中にさりげなく織り込められ、読者を魅了してやまない。ここでは、それらの創作に引用されている読書体験や翻訳体験を指摘しながら、彼の文学創造の場に下り立ち、読書・翻訳・創作の三者の結びつきを考察したい。

まず、昭和46年に河出書房新社から刊行された『絵空ごと』を取り上げよう。この作品は、勘八とその友人たちの交遊を描きながら、文明批評や絵画論などが自在に語られる小説である。その中にウィルコックスという英国人が、日本で英国風の寄宿舎を作って大当たりする場面がある。これは明らかに、世間の親たちの教育観への批判や日本人の外国かぶれをユーモラスに描いたものである。ここに次のような部分がある。寄宿舎に入った学生たちが英国風になりきろうとして取る、度を越した行動が戯画化されている。

> この学生達は妙なことを知っているようで、例えば大学生の一人は英国の紳士がハンケチをポケットに入れる代りに上衣の袖とワイシャツのカフスの間に押し込んで持って歩くというのは本当かと聞き、聞かれた監督が子供の頃にそういうのを見たことがある気がするのでそうするものもあるらしいと答えるとその大学生は監督が下賤の出であるので知らないのだと決めて以後ハンケチは上衣の袖とワイシャツのカフスの間に押し込むことにした。

一文が非常に長く、しかも読点が最初の部分に一つあるだけの、吉田健一特有の文体である。ここで書かれている奇妙な風習は、彼の想像力によって生み出されたものだとずっと思っていたが、ある時、シャーロック・ホームズの「白面の兵士」を読んでいると、次のような記述に出会った。

> イギリスではぜったいに見られないほど日にやけた男らしい紳士が訪ねてみえて、ハンカチをポケットでなくそでぐちに押しこんでおられたら、たいていどこの方だか分かりますよ[13]。

この場面は、ある日、ホームズのところに初対面のドッド氏が訪ねて来て、ホームズがこの依頼人の人物像を推理して相手を驚かせる場面である。

吉田健一がホームズ物の愛読者であることは、よくエッセイなどで述べているところである。そのような読書体験が、創作の中に反映しているのである。

『本当のような話』は、昭和48年に集英社から刊行された小説である。民子という未亡人と中川という男性の関わりが中心になっているが、ここでも彼らの人間関係ではなく、彼らの会話の中に、文明論や東京論を語らせる手法が取られている。この本にも吉田健一の他の著作や翻訳との関連箇所が見出だされる。

作品の冒頭部で民子の人となりが紹介される部分に、次のような表現がある。以下、『本当のような話』の引用は、集英社文庫による。

民子はそれで書簡集というものが好きでこれはセヴィニエ夫人のからクローデル、ジードのまで、そしてデッファン夫人とホレス・ワルポールの往復書簡というようなものも含めて大概は揃えていた[14)]。

これは民子の読書観について述べた部分である。何気なくクローデルとジードの名前が出てくるが、これはおそらく、吉田健一自身が河上徹太郎と共に翻訳したクローデルとジードの往復書簡集『愛と信仰について』（ダヴッド社・昭和29年）のことを念頭に置いていると思われる。

また、今引用した部分の少し後に、「友達の手紙を読む積りで本が読めない位ならばという考えさえ民子の頭には浮ばなかった。」とあるのは、民子にとって本を読むことは、何か特別の行為ではなく、友達の手紙を読むことと同様の、ごく自然な日常行為であることを逆説的に述べているのである。本とは友人に宛てた手紙であるという考え方は、それほど特別な考え方ではないだろうが、吉田健一が若い頃愛読し、その後翻訳もしたスティヴンソンの『旅は驢馬をつれて』の序文に次のようにあることも、関連があるのではないだろうか。

どのような本でも、本質的には、それを書くものの友達に宛てた廻状である。彼等のみが著者の真意を理解し、どの頁にも個人的な音信や、友情の証や、感謝の言葉を見出す。

『本当のような話』の第２章の末尾で、民子が銀座の西洋料理店で一人で食事をしているシーンがある。食後にシャルトルーズを飲みながら雨の降っている町の景色を眺めている情景が、次のように描かれている。

民子が頼んだ酒の緑も雨の日には光沢を適当に減じて外の灰色に合ったものになる。それにこれが洋酒の中で恐らく一番強いものであることはその芳香を放つ甘さにも拘らず雨でものの輪郭がぼやけている中で眼にその働きを取り戻させる効果があって、その次にその酔いで再び雨の気分に人を持って行くその兼ね合いは微妙だった。兎に角民子はそれを飲んでいて本式にその二階から雨の町を眺めている自分になった。（57ページ）

この部分と関わりがあると考えられるのは、『定本落日抄』（小澤書店・昭和51年）に収められている「酒談義」の次の一節である。

青いシャルトルーズは、雨が降る日に窓越しに街を眺めながら三杯までといふ名言を吐いた先輩がゐて、シェリーにもさういふ所がある。（103ページ）

吉田健一は先輩の名言を、そのままこの場面に生かしたのだった。また、今引用した「酒

談義」の少し後には、『残酷な海』というイギリスの小説に出てくるシェリーを飲む場面に言及しているが、この小説も、吉田健一は昭和28年に翻訳している。ただし、その時の題名は、『怒りの海』（新潮社刊）である。

『本当のような話』の第6章に、中川が民子の家に泊まった翌朝早く、帰り道にあった食堂に入ってビールを飲みながら、住まいや生き方について思いを巡らす場面がある。その中に、「極めて唐突に中川はヴァレリイがドガの所で何の味もしないマーマレードを幾度も出されているうちにそれが好きになったと書いているのを思い出した。」（147ページ）という部分がある。このヴァレリイのエピソードは、彼が翻訳した『ドガに就て』の次の部分を踏まえている。

> 彼の家の食堂は二階にあつて、私は其処で度々、ひどく粗末な晩餐の御馳走になつた。といふのは、ドガは便秘と腸カタルとを極度に恐れて居た。それで、ゾエといふ年取つた召使が運んで来る犢や、水だけで煮たマカロニには、全然味が付けてないのだつた。それがすむと、私が始めはどうしてもたべられなかつた、スコットランド製の一種のマーマレードが出た。それはしまひには馴れてしまひ、此の頃、それの齎す思ひ出の為に、嫌ではなくなつたやうである。（33ページ）

これによれば、味がしないのは犢やマカロニの料理であり、『本当のような話』では、マーマレードのことになっている点がやや異なるが、30年以上も前に、28歳の若さで翻訳したヴァレリイの本のことを、創作の中に取り込んだのだった。

『本当のような話』の半年後、昭和48年7月に河出書房新社から刊行された『金沢』にも、若い頃の翻訳と関連する箇所がある。第1章に書かれている、金沢の町にある店の室内描写を見てみよう。

> 又そのような町であるだけに思い掛けないものを見ることもあって内山が偶に寄るそうした店の魅力の一つはそこの壁にルカ・デラ・ロッビア風の例の浮き彫りした紺と白の陶器の像牌が無造作に掛けてあることだった。（中略）或は要するにその店で飲んでいて何の不自然も覚えずにそのロッビアの牌を新鮮なものに感じることが出来た。

ここに登場するロッビアは、イタリア・ルネサンスの彫刻家である。ペイターの『ルネサンス』にロッビアのことが書かれている。吉田健一は昭和23年に角川書店からこの本の翻訳を出版しているので、今引用した『金沢』の記述は、その体験の反映であろう。ただし、角川書店から出た吉田健一訳『ルネサンス』の原本は未見であるので、該当部分は別宮貞徳訳『ルネサンス』（冨山房百科文庫9・昭和52年）によって引用することにしたい。

> いくらか多くのものが、ルカ・デルラ・ロッビアについては残っている。その経歴、外面的な変化と運命について、いくらか多くのものが作品を通じて知られる。ルカの

あの有名な淡い青と白の陶器ほど、本当のトスカナの雰囲気を伝えるものはないと思う。(72ページ)

この他にも、「今年は梅の実が食べられなかったと言ったのは誰だったのか。」という、『金沢』の短い表現についても、おそらくこれは吉田健一が愛読していたラフォルグの『伝説的な道徳劇』の一節、「もう直ぐ冬が来る。……今年は乾し李が食べられなかったなどと言ってゐたのだ。……」[15]という部分が遠く響いているように思われる。

5．おわりに

吉田健一の絶筆は「桜の木」という短篇である。主人公の三上に託して、日常を生きることの充実感が語られている。その中に次のような箇所がある。

三上が今でも使っているのは濃い水色の紅茶茶椀でそれが一つしかないのは初めからそれがそれだけで洋品店の窓に出ているのを三上が買って来たのだった。こういうものが幾つか組になっているとは限らない。その水色は茶椀の裏も表もで赤い罌粟の花と英国の麦畑に咲く矢車草が丁度そういう色をしている。三上はそれに合う色に紅茶を入れるのに苦心するのかそれに合う色が紅茶がよく入ったことを示すものだからなのか自分でも解らなかった。併しそうして入れた紅茶をその紅茶茶椀から飲むのは旨かった。その水色が空に拡るとも見えるのである[16]。

紅茶を飲むというだけのことに、人がどれだけ心を込めることができるか。しかも自分のために飲む日常の紅茶にである。ここには、深い水色の茶椀の色合と紅茶の色のハーモニーが、抒情的とさえ呼べるような美しさを湛えており、吉田健一の著作や創作の数ある名場面の中でも、一読忘れがたいものの一つである。そして、このシーンには、吉田健一の遥かな青春の記憶が重ねられていることを、読者は注意深く読み取る必要がある。

『交遊録』の第3章「F・L・ルカス」の中に次のような記述があるのだ。ルカスは、吉田健一がケンブリッジのキングス・コレッジで指導を受けた教官である。当時まだ学者になるか文士になるか決心がつかなかった吉田健一が、文士の方を選んだのも、ルカスの影響が大きかったからであると、自ら述べている。そのような存在だったルカスに、ある日お茶に呼ばれた返礼として、彼が自分の下宿にルカスを招待した。その時の様子が書かれている部分を引用してみよう。

ケンブリッジといふ學生の町は學生がどんなに質素にでも又贅澤にも暮せるやうになつてゐるのがその公認された特色とも呼ぶべきものになつてゐて町を歩いてゐると日用品の安ものを売つてゐる市場から一流の酒を揃へてゐる酒屋、又高価な美術品の店まであり、凝つた瀬戸物などを陳列してゐる小さな店で組で作つたのでない紺碧の紅茶々椀を一つ買つて使つてゐたのをルカスは褒めてウェエルスの山麓の矢車草がさ

ういふ色をしてゐると言つた[17]。

絶筆となった「桜の木」で描かれていた濃い水色の矢車草の色をした紅茶茶碗とは、ケンブリッジ大学留学中の吉田健一が使っていた思い出の茶碗だったのである。これは、読書体験や翻訳体験の反映ではないが、吉田健一の創作には、さまざまな実体験をも含めた経験が織り込められている。

彼が直接自分のことを語ることは少ない。しかし、吉田健一の文学世界には、読書や留学や翻訳など、彼の全人生が投入されているのである。

〈注〉

1）集英社『吉田健一著作集』補巻Ⅰ（昭和56年）、95頁。
2）注1）書、94頁。
3）岩波文庫『旅は驢馬をつれて』（昭和26年）、あとがきによる。
4）注1）書、91頁。
5）注1）書、240頁。
6）集英社『吉田健一著作集』補巻Ⅱ（昭和56年）の年譜によれば、暁星中学時代に、交友会誌に「ギネアピッグ」という文章を発表している。この文章は、新潮日本文学アルバム『吉田健一』（1995年）の29ページに載せられている。
7）『交遊録』（新潮社・昭和49年）、45頁。
8）注6）年譜によれば、『文学界』昭和12年11月号の文化月報・仏文学に「ラフォルグ論」があるとのことだが、未見。
9）『書架記』（中央公論社・昭和48年）、10頁。
10）新潮社『吉田健一集成』4（平成5年）、21頁。
11）『絵空ごと』（河出書房新社・昭和52年）付録による。
12）岩波文庫『英国の文学』（平成6年）の高松雄一氏の解説による。
13）新潮文庫『シャーロック・ホームズの事件簿』（延原謙訳・昭和28年）、50頁。
14）集英社文庫『本当のような話』（昭和52年）、18頁。
15）注9）書。
16）『道端』（筑摩書房・昭和53年）、169頁。
17）注7）書、59頁。